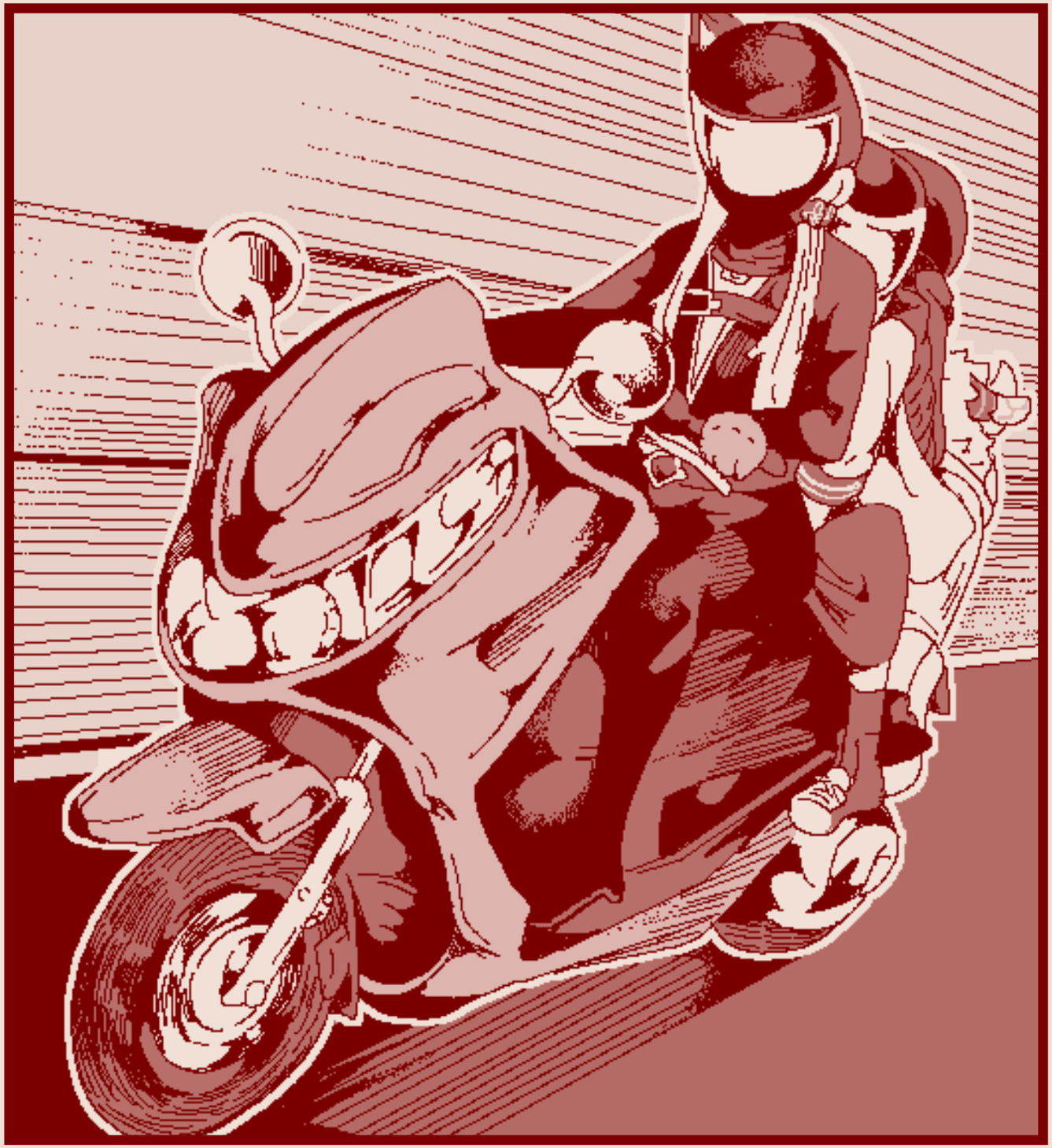
1

　ビッグスクーターから声を掛けてきたのは、ピッチリ系のライダースーツを谷間まで開いた光の実母 鬼塚 秋子 32 歳 (バツ2) であった。
「さぁ、勇太君とその友達！早く乗るのよ！」
(ちょっと、日野君！
　あの不審者と知り合いなの⁉)
　秋子自体は、オグドモンから勇太についての情報を知らされていたが、勇太自体は光の話以外は何も知っていなかった。
(いやいや⁉知らない！知らないし合った事ないけど…あの髪色と瞳の色は…。)
「どうしたの早く乗って！」
(どうするたい⁉)
「乗…ります!!!」
(大丈夫！ああいう見るからに不審者だけどやたら自信満々のタイプは逆に大丈夫!!)
　露骨に不信そうな茜の手を引き、勇太は秋子のバイクに乗り込んだ。



2

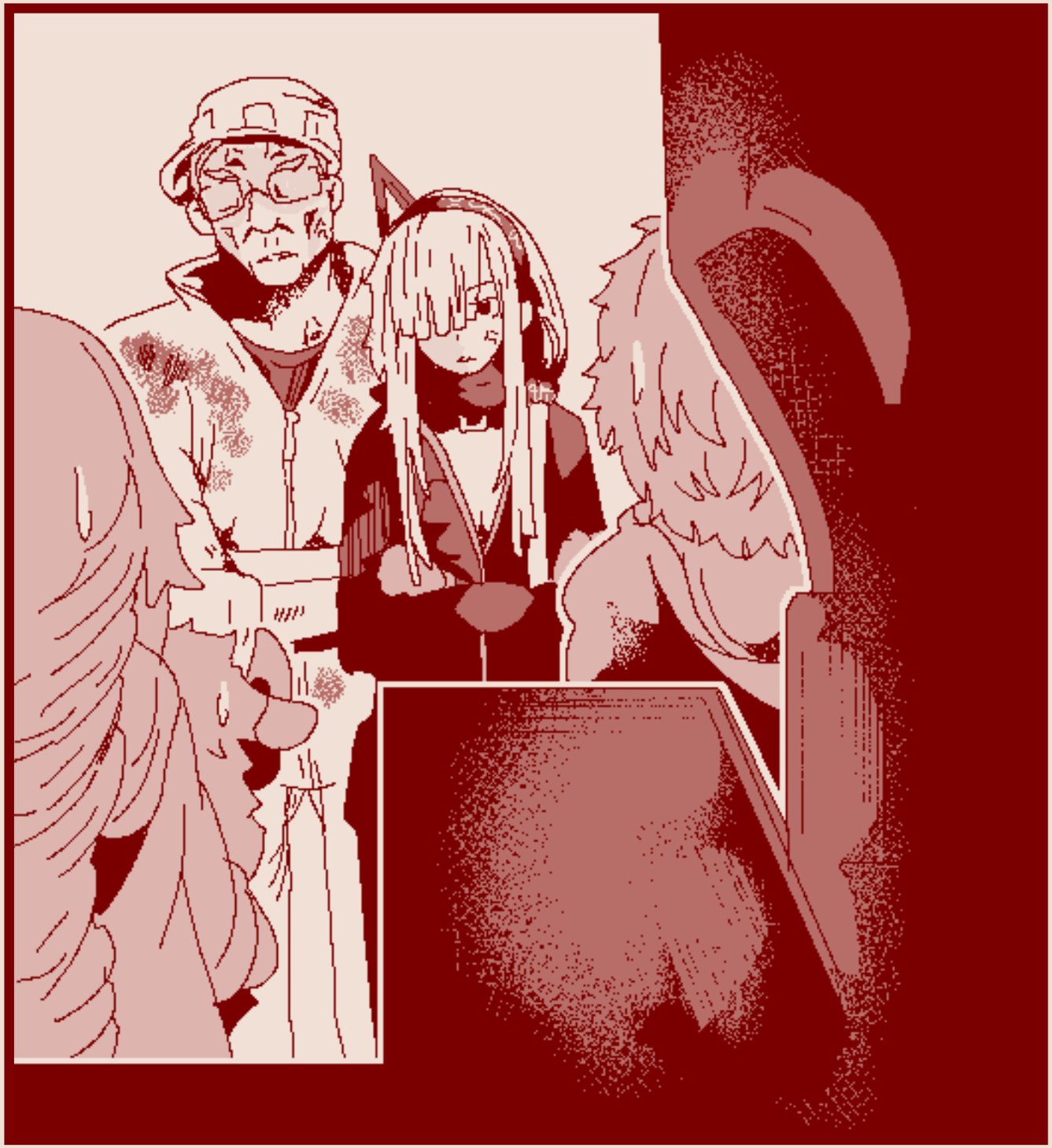
「どうやら、巻けたようね。」
「3 人乗りは、さすがにまずかやろ !?」
「4人だよ〜。」
「抜かりないわ。
　頭のアンテナで警察車両の動きは筒抜けよ。
　伊達や酔狂でこんな格好してると思ってた？」
(((思ってた…。)))
「それでどこ向かってるんですか？」
　エンジェモンの集団を振り切った勇太達は、秋子に目的地も告げられる事もなく結構な時間バイクに乗せられていた。
「ふふ…秘密基地よ？」
「真面目に答えてくれません？」
「！…しっ、ちょっと止まるわよ！」
　急ブレイキを掛けられた勇太達は大きく揺らされた。
「危なかやろ !?」
「しっ…アレ見て。」
「？」

3

　堤防の上を勇太達が敵対している天使型デジモン達が運営している宗教法人である The Elect of Zion(ジ・エレクト・オブ・ザイオン) の信者達が行進していた。
　信者たちが、神を讃え神に請い願う聖歌を歌いつつ、十字架とイコン、司祭と詠隊の後に続いている。
「何やってるんですかね？」
「十字行ってやつね TEZ にとっては宣伝の意味合いが強いけど…。」
　しばらく様子を見て、勇太達に気付く事もなく集団は離れて行った。
「…どうやら、私達を探してるようではなさそうね。」
「あれ許可取ってるんですかね？」
「取ってないでしょ。
　それで、ニュースになってたし。」
「こわ〜。」
「埼玉のこんなとこまでやって来てるとはね…。」

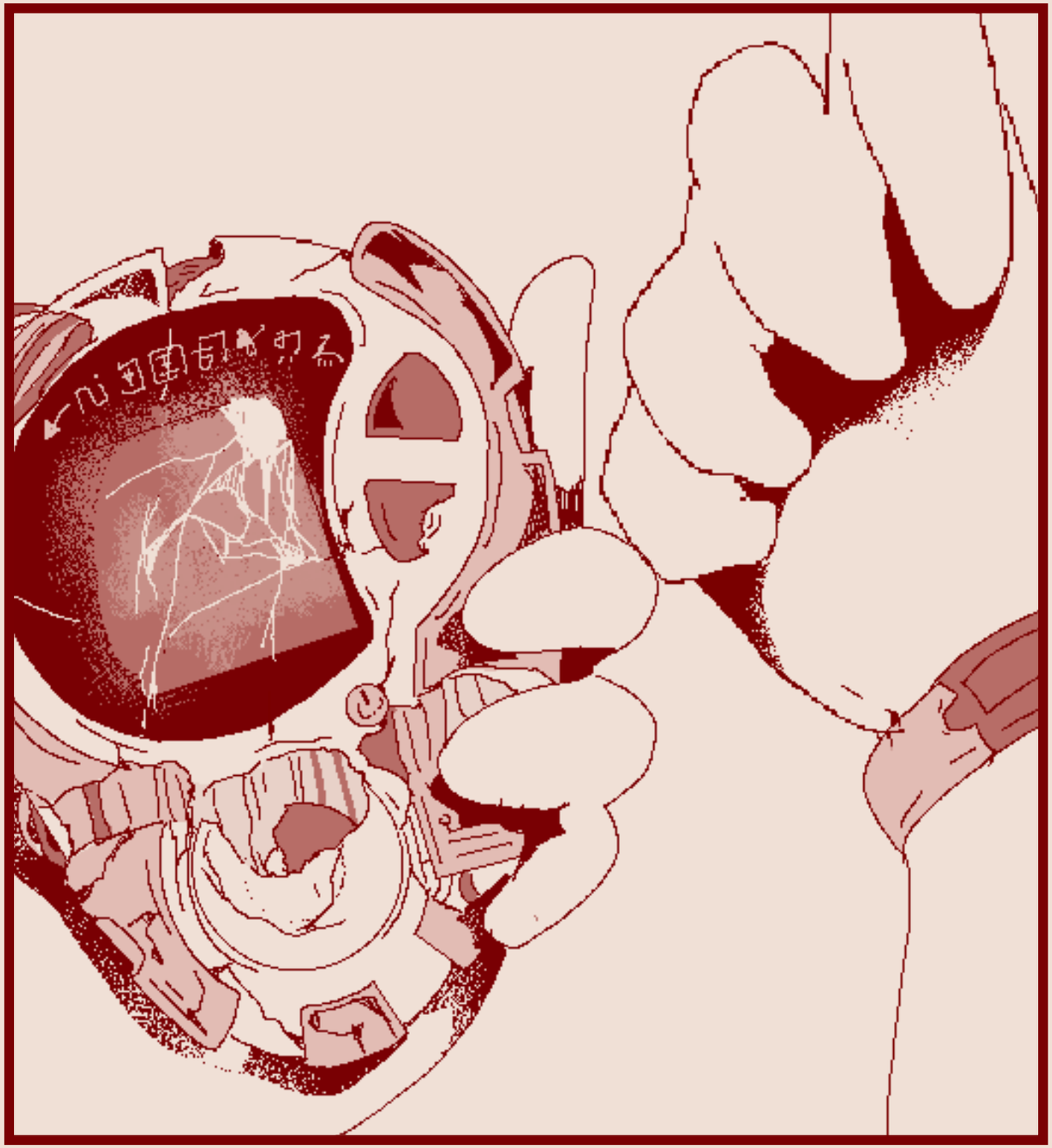
4

「さて、ここが目的地よ。」
「I…WA…。」
「岩家製造株式会社…！
　大企業たい！思い出した！鬼塚…！昔、ニュースになってるの聞いた事あるたい！
　学生でパワードスーツの開発にしてたって!?」
「ふっ…昔の話よ。
　今は、娘の為に闘うバツ2のエージェントよ。」
（ほんとに？）
（一気に胡散臭く感じるね～。）
「埼玉支社は、私も世話になってたし今着てるパワードスーツの開発に使わせてもらってたの。」
「はえ～。」
「さっ行くわよ。」



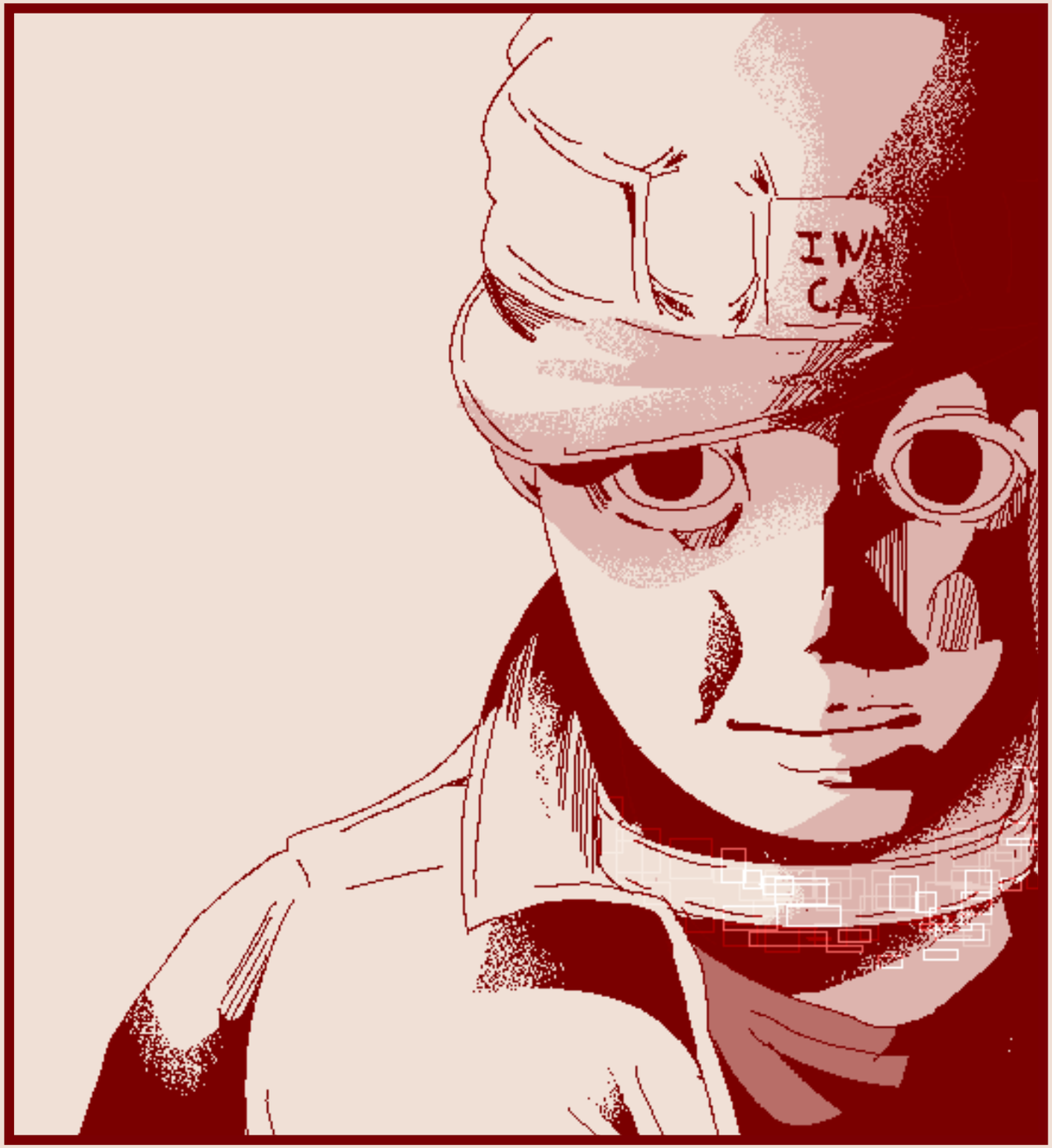
5

「てめえ、秋子俺は、光ちゃんの事おめえの事許してねえ言ったろ。
　この間も俺がいない間に入り込みやがって帰れ、秋子。」
「話したでしょ、光を助ける為に協力してくれって。」
　会社に入ると工場長と思われる初老の厳つい男性に歓迎されてない雰囲気で迎え入れられた。
「おめぇデジモンだのなんだのって…あんな男に靡いたと思ったら本格的に頭もイカれたのか？
　圭吾もあの世で泣いてるぞ。」
「ふたりともこのボケジジイの戯言は聞かなくていいわよ。」
「工場長無視して、いい訳ねえだろ。
　てめえは昔からひとの話聞きやしねえ。
　というかなんだその嬢ちゃんと坊主と羊は？
　今度は誘拐か？」
「あの…俺達、秋子さんに助けてもらって…。」
「いや、信じてもらえないかもしれませんけど…私もまだ信じられないんですが…ねえ？」
「あはは…こんにちは。」
「ほら、みなさい。」
「はぁ…、悪いな嬢ちゃん達ちょっとこの馬鹿と話すから待っててくれ。」
「はは…ごゆっくりどうぞ。」
　そう言うと茜達は引き攣った顔で秋子達を見送った。



6

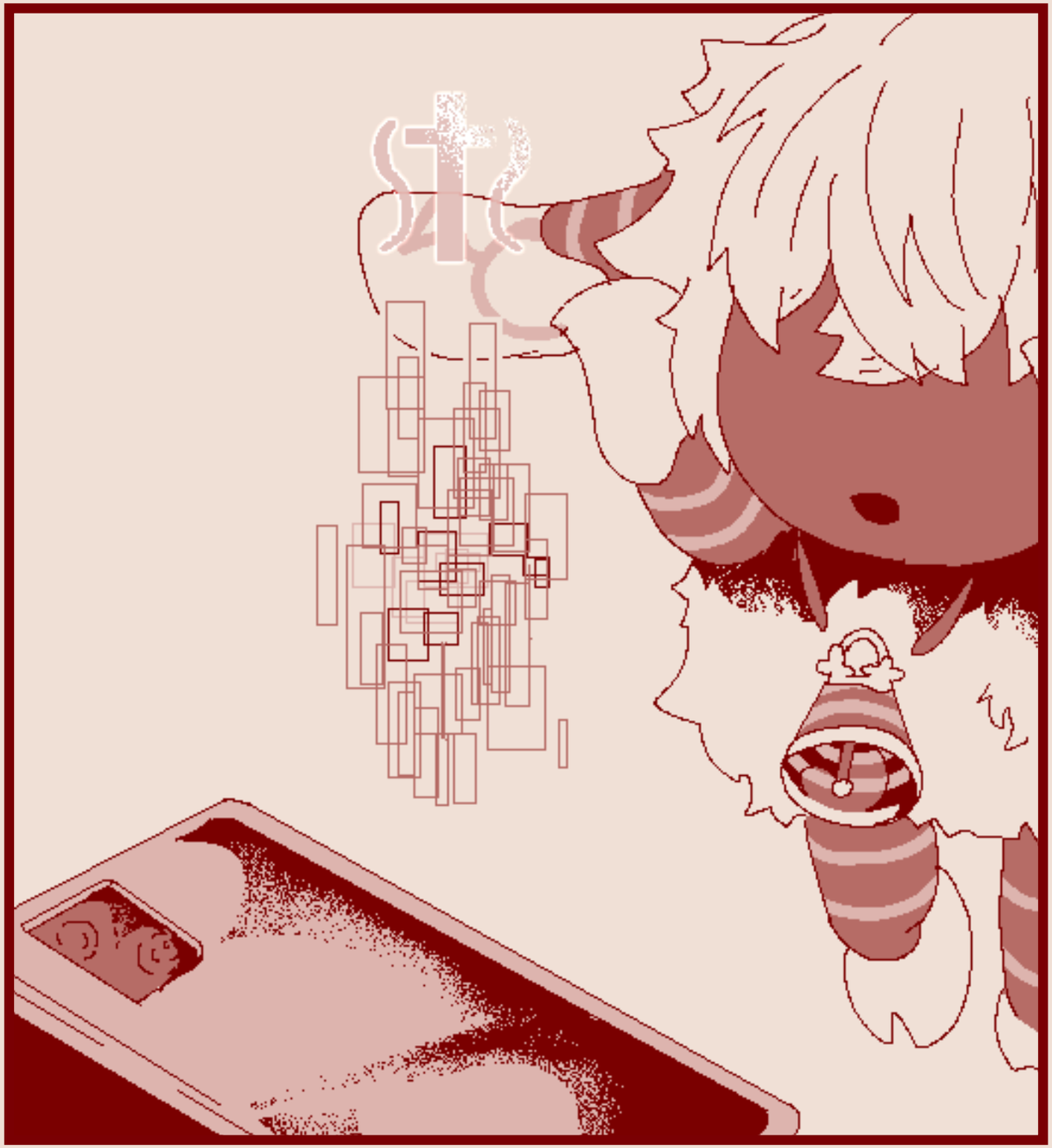
　秋子達の口論が遠巻きに聞こえてくる。
「そういえば、日野君と私のデジヴァイス？だっけ違うのね。」
　手持ち無沙汰なのか茜が勇太に話しかけてくる。
「あ、うん。
　そういえばそうだね。
　雪奈さん…DW であったひとも違ったけど委員長みたいな腕時計タイプって初めて見たけど。」
「バイタルブレスってタイプだよ～。」
「バイタルブレス？」
「そうそう、テイマーのパルスがダイレクトに伝わってくるから、パートナーデジモンに影響強く出るタイプだよ。
　勇太さんのは D－3 タイプって言うジョグレスに特化してるタイプだよ。」
「へぇ…使ってたけど全然知らんかった…。」
「茜のバイタルだと補助系に特化してる感じかな～、気が強いようで意外と繊細さんってやつ？」
「余計なお世話たい！」
（ほんとかな…？）



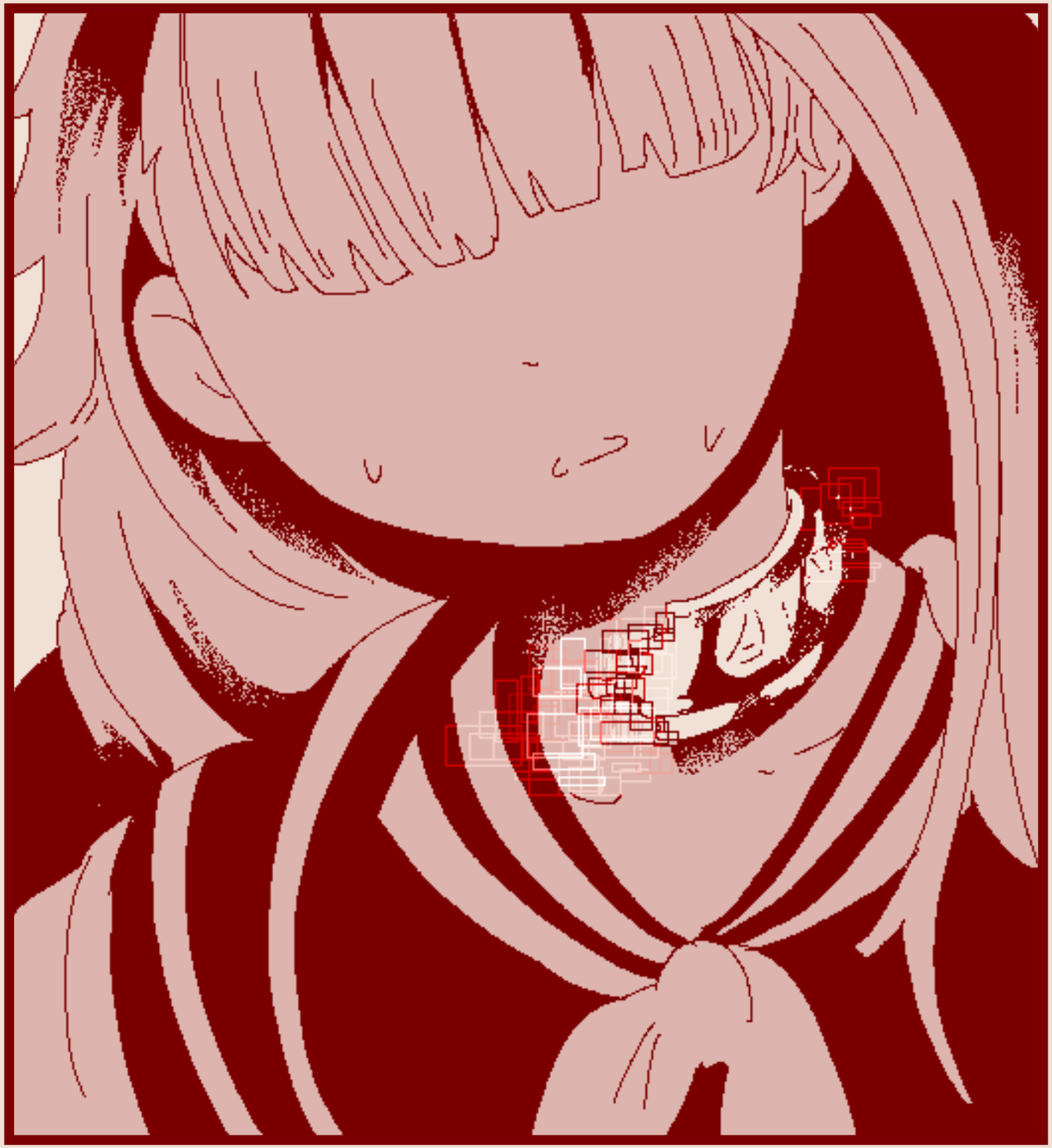
7

　そんな3人をある作業員が覗いていた。
　その目に光はなく、人間ではあるが人間ではない人形のような表情。
　そして、首には白色のリングが輝いていた。
　ゆっくりと作業員が3人の後ろに立つ。
「うん…？おい、哲司なにサボって…!!!
　逃げろ嬢ちゃん達!!!」
「？…!?」
　工場長の叫びが響いた瞬間、作業員が大型のモンキーレンチを振りかぶっていた。
「委員長!!!」
「きゃっ！」
「っつ!!!だらあ!!!」
　勇太は委員長を庇い避けたが、右肩をモンキーレンチが掠った。
　作業員は自身の力で、左腕を解放骨折を起こしていた。
（っつ…！普通じゃない…！）
　解放骨折を起こした腕に対して何も反応をせず、逆にその腕を鞭の様にしならせ勇太達に襲い掛かろうとした。
「すまみません!!!」
　勇太は、フェアリモンの脚を展開、作業員の周辺の空気比率をコントロールし、失神させた。
「大丈夫、委員長？」
「日野君こそ腕!?」
「折れてないし、このくらい日常茶飯事だよ。」
(…この白いリング…確か天使達の街でみたコンセクレイションリング。
　デジモンだけじゃなくて人間にも有効だったのか…。
　このひとも TEZ の信者なのか？）

「勇太君!!!」
「？…!!!??」
　秋子の声で振り向くと別の作業員、しかも大勢の作業員が勇太達に襲い掛かってきた。
　新しく襲って来た作業員も大型の工具を殺す気で顔色一つ変えず振り下ろす。
　間一髪で勇太は避けたが、振り下ろした工具は最初の作業員の右腕を文字通り粉砕した。
「チッ！」
（空気のコントロールはこの人数分の空間を殺さないでやるのは流石にまだ無理だ…！）
「すんません！」
　勇太は、作業員の顔面を蹴り飛ばし失神させる。
　すかさずエレプモンがエレキネットを飛ばし、作業員の動きを止め、勇太が蹴り飛ばしていく。
　秋子もスーツに仕込んだパワードアシストを起動し、吹き飛ばす。
　それでも無数に湧いて来る作業員をなぎ倒し、鎮圧するのに十数分掛かった。

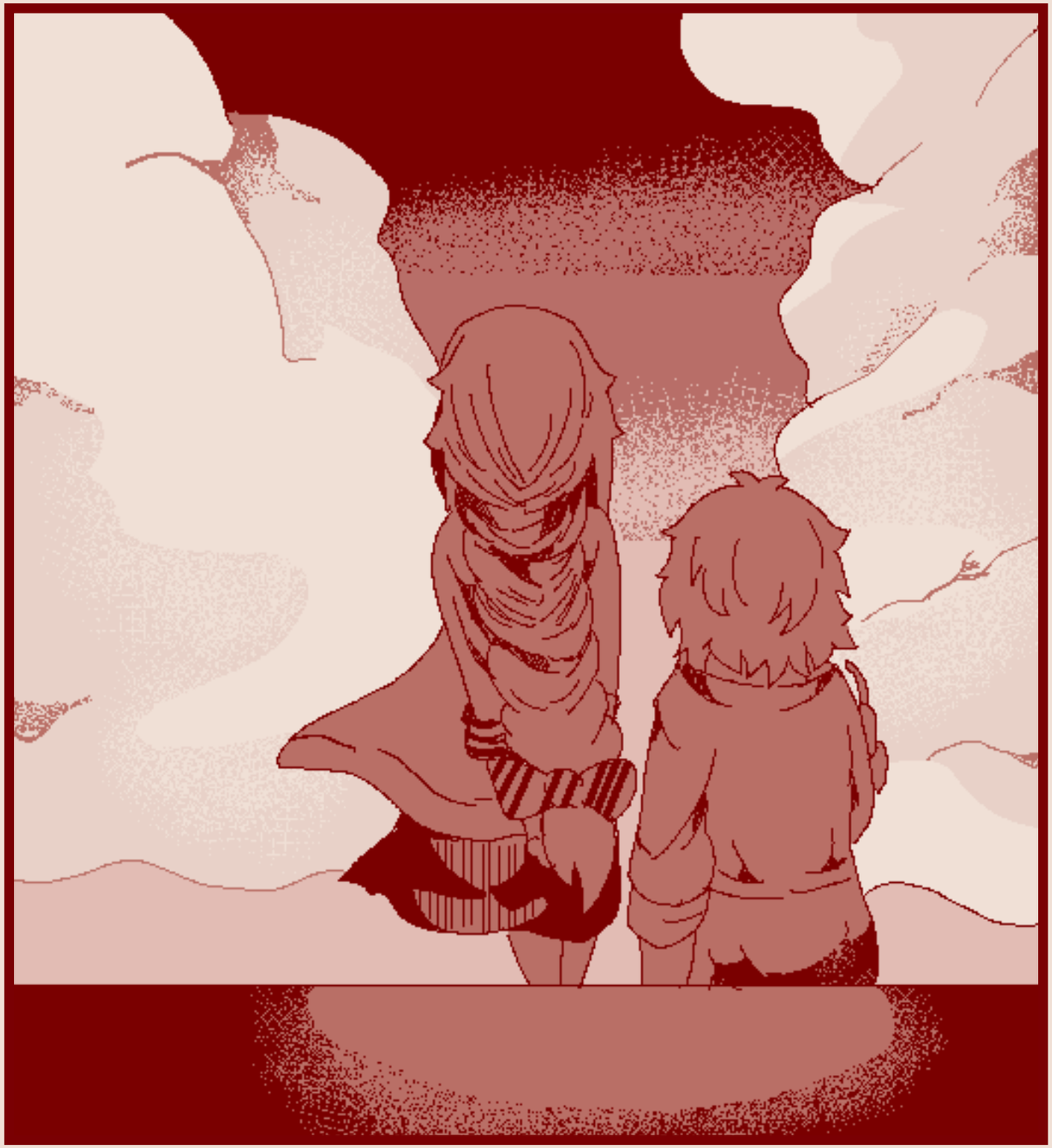


「はぁはぁ…、流石にあり得ないだろ…こんなに…。」
「勇太さん、多分これが原因だ。」
　エレプモンが作業員のポケットから飛び出たスマホを見ていた。
　このアプリからデジモンの気配を感じる。
　エレプモンが電気をスマホに向けて発するとデジモンの消失反応の様にデータが霧散して消えていく。
「これって…。」
　スマホが起動していたのは、以前茜が勇太に勧めていた厚生省の健康維持アプリであった。



「委員長！」
「！」
　茜が首に触るとそこには、コンセクレイションリングが形成されかけていた。
「動かないで！」
　勇太が蹴りでコンセクレイションリングを弾き飛ばす。
「ちょっと…あぶ…「委員長大丈夫⁉なんか頭が痛いとか⁉」
　勇太が文字通り、目と鼻の先で心配そうに顔を近づける。
「う…うん。」
　何か一言ありそうな茜が赤面し、押し黙ってしまった。

「駄目だ…こっちのリングは剥がせないし…壊せない。」
　その後、勇太達がなんとかコンセクレイションリングを作業員から外そうとしたが、ビクともしなかった。
「一体化…してるのかな？完全体ならとかそんな云々じゃないかも…。」
「でも、以前 DW では外せたはず…。」
「それは、デジモンと人間の強度の差とか、勇太さんが見たリングより改良されてるとか幾らでも言えるかも…。」
「とりあえず、外せないって事ね…。
　起きたらまた襲ってくるのかしら？」
「多分、秋子さんの言う通り。
　勇太さんの話が正しければ、司令を出している物がある筈…流石に完全スタンドアローンな兵器なんてものはないだろうし…。」
「するってぇと、こいつらはこのままって事か？」
　工場長が静かにしかし、怒気を含ませて話す。
「今のままなら。」
「坊主が最初に墜とした奴…哲司っつうんだがな…高校卒業でウチに入ってきてな…オタクで生意気…何かと言えば、でも…だって。
　まぁ、今時の若い奴でな。
　ただ…機械語る時の目はそりゃあガキみてえに輝かすんだよ。
　最近は、やっと娑婆気も抜けていい面になってきた。
　それが、この腕…こいつのこの先どうすんだ？
　他の連中だってそうだ…。」
「…。」
「秋子、てめえが光ちゃんにした事はまだ許しちゃいねえが、デジモンの話信じてやるよ。」
　工場長は立ち上がり、残った作業員に叫んだ。
「てめえら、やる事分かってんだろうな⁉
　ありったけの兵隊集めてこの落とし前は、キッチリ着けてやる!!!！
　おい！岩家の親父さんに連絡しろ!!!」



11

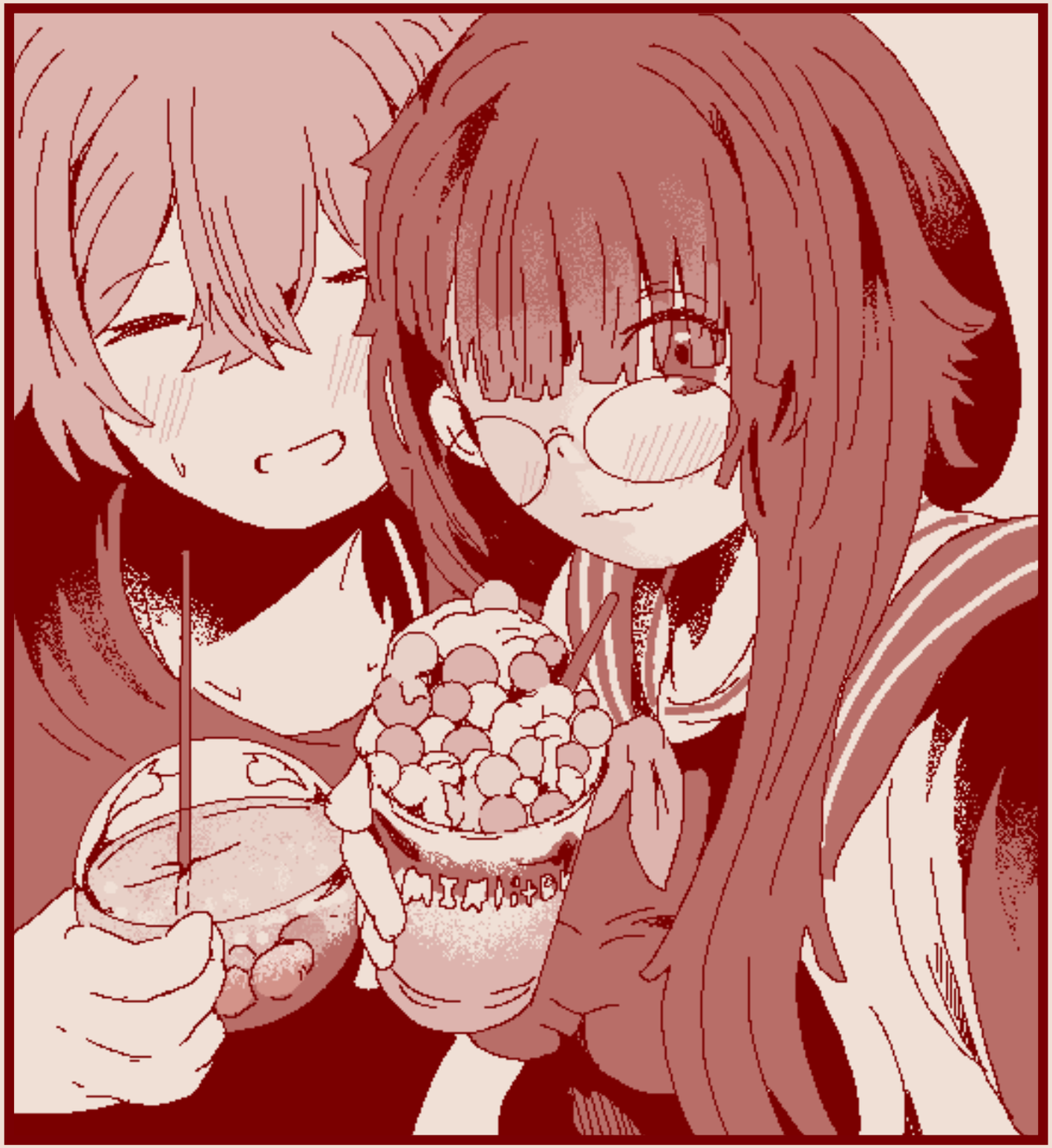
　それからは、工場は一気に慌ただしくなった。
「敵はネットからこっちの個人情報を探ってくる！
　本社に連絡して、人事系のデータは全てスタンドアローンにしろ！
　紙媒体は全部持ってくぞ！ひとつでも残したら殺すからな!!!」
「工場長！社長の知り合いの神奈川の工場一週間押さえました！」
「よし！昼間だが夜逃げするぞ!!!敵もバカじゃねえ！準備は短えぞ！向こうで2日で用意できるようにしろ！」
「勝司は、伝手使って福岡からあのゲテモノ（秘密兵器）用意しろ!!!」

　工場長を中心として、軍隊のように統率の取れた動きで引っ越し準備を済ませて神奈川の工場へ引っ越しを済ませた。

　それから一日が過ぎ、急ピッチで勇太や茜のパワードスーツと武器の開発が進んでいた。
「ふぅ…。」
　勇太も半強制的に手伝う事となり、ほぼほぼ夜も寝ないで作業に取り掛かっていた。
「休憩？」
「あ、うん委員長は？」
「私はそんなに、スーツの採寸と動作プログラムだけで、女の子はいいって。」
「いいなぁ。今時、それって差別じゃない？」
「確かにね。」
　茜は微笑んで勇太の隣に腰掛ける。
「そんな日野君に朗報。
　この請書、私と発注会社に一緒に届けて来いって。」
「おつかい？」
「作業も一段落したからその後、遊んできていいってさ。」
「言っといてなんだけど、それは…。」
「子供は遊ぶもんだって、だからその…デ…デー。」
「？」
「なんでもなか！ほら、行こ！」
「わ！ちょ、汗かいてるからシャワーと着替えくらい!!」

12

「おっわ、綺麗〜！」
「ちょっと、日野君はしゃぎすぎ、目立つって。」
「ごめんごめん。
　でも、俺水族館って小さい頃ぶりでさ。
　えっ白いイルカ？イルカってショーでしか見たきっりだ！」
「日野君って妹さんいるんだっけ？」
「うん、今小4。
　水族館行ったのも日花が行きたいって言ってさ。
　あの時は、よく分からなかったけどなんかワクワクするね。」
「ふふ、ここまで喜ぶなら連れて来た甲斐があるってもんね。
　自分の趣味で男の子っぽくないと思ったけど正解だったかな。」
「委員長も水族館好きなの？」
「うん、福岡にいた時に連れてってもらって、そうそうラッコのいるところ。」
「知ってる！委員長って結構動物好きなの？
　エレプモン抱っこしてた時も慣れてたみたいだったけど？」
「知らなかった？ウチ猫飼ってるのよ？」
「あ〜なんか分かる。
　こう学校のウサギとかも一番しっかり世話してるし。
　なんか愛あるな〜、って。」
「な、何言いよーと!?愛とか、恥ずかしかこと言わんでよ！」
　茜が、バシバシと勇太の背中を叩くがどこか赤面しながらも嬉しそうであった。
「？どうしたの？」
「いや、光にも見せたいなって思って。
　前、ちょっと話したけどこういうとこあんまり来た事ないって言ってて、馬鹿々々しいとかも言ってたけどきっと俺みたいにはしゃぐんだろうなって。
　あっ前にさ、海行った時に」
「…。」
（なんやろ…鬼塚さんと話しよる時の日野くんの笑顔、いつもと違う…。）



「え～写真は恥ずかしいって。」
「いいじゃない、せっかくだし。」
「委員長も女子だね、俺こういうのよく分かんないや。」
「何言ってるの。
　日野君だってよく特撮とかの写真撮ってるじゃない。」
「まぁ…そういうと確かに…そうい感じ？」
「そうよ。」
　茜がスマホで写真を撮る。
（へへ、ま…待ち受けにしよ。）
「でも俺もそっちの色々乗ってるのにすれば良かったかな？」
「一口食べる？」
「ほんと？ありがと！俺のも飲んでいいよ！」
　特に勇太は、困る事もなく自分の飲み物を差し出す。
（これ間接キス…？）
「あっついいつもの癖で…ごめん。」
「だ…だ！いじょうぶ！そんな子供じゃなか!!」
「そ…そう？」
　半分ひったくる形で茜は勇太の飲み物に口をつけた。
(!!!…!!!…!!!！)
「うん！美味い！色だけじゃなくて味もそれぞれ違うんだね。」
「割とこういうの好きそうなイメージなかったけど好きなの？」
「う～ん、俺はいっぱい食べれないけど光は結構好きかな。
　ただ、この量は光も飲み切れないかもな…。
　ヴォ―ボモンはご飯ものだし、デビドラモンはこっちの爽やかな感じが好きかな？
　そう言えば前さぁ…」
「…」
(…また、鬼塚さんの話。
　ねぇ…日野君。)

　ある程度遊び回った勇太達は、海岸線沿いで休憩してから帰る事となった。
「あっそう言えばさっきの写真。」
　茜がデジラインで、先ほどまでの写真を送る。
「結構色々行ったね。
　叶…あっ従兄なんだけどさ、男だけだとやっぱこういうの疎くて楽しかった！」
「ふふ…あっこの顔日野君目半開き。」
　茜が勇太にもたれかかる。
「もう、やめてよ。
　委員長も光みたいな事いうなぁ…。」
「…。」
（ねぇ…日野くん。
　なんで鬼塚さんの話ばするん？）
「うわ！」

15

　気付いたら茜は勇太を押し倒していた。
　（今、目の前におるのはウチやろ？）
「いてて…委員長大丈夫？」
　茜は無言で勇太に顔を近づける。
「委員長？」
「ねぇ…日野くん？
もしDWに行けんかったら…鬼塚さんに会えんかったら…もしかしたら、鬼塚さんは日野くんのこと待っとらんかもしれんよ？」
「…。」
「それでも危なか目に遭うてまで、鬼塚さんに会いたかと？」
（目の前におるウチじゃ、だめなん？）
「…光だけじゃない。
　デビドラモンにヴォ―ボモン…アンティラモンにサンドリモン。
　皆に会いたい。
　でも、こっちにひとりだけ帰って来て光と離れてて…会えなくて。」
（嫌…それ以上は。）
「光には偉そうに、どんなに嫌われてもいいって言ったけど。」
　蝉と波の音だけ少しの間流れた。
　勇太の目から涙が一筋流れた。
「俺の初恋って聖さんだと思ってた…でも、それと全然違う…やっぱり光の傍に居たい。
　いなくなって分かったんだ俺、光の事が好きなんだって。」
「…。」
　茜は何かを言おうとしたがそれを飲み込んだ。
　起き上がり、勇太を引っ張りあげる。
「じゃあ、気張らないと！
　ウチも協力するけん、今のこと、ちゃんと鬼塚さんに言うてあげんしゃい！
　どうせ日野くんのことやけん、まだ言うてないっちゃろ！」
「はは…分かる？」
「バレバレったい！」
　茜が勇太の背中をバシバシ叩く。

16

「じゃあ、ウチ一回部屋戻るから。」
「あっうん、じゃあ俺帰った事秋子さん達に言っておくから。」
「うん、ありがと。」
　工場に帰った後、勇太と茜は別れた。
　別れる時の茜は、笑顔であったが勇太と別れ、部屋に戻った瞬間。
　自分でも気付かないうちに涙がこぼれていた。
　それに気付いた瞬間に堰を切ったよう涙と嗚咽が漏れだした。
　バイタルブレスからエレプモンが出てきて、茜の足を黙って撫でる。
　茜はへたり込みエレプモンを抱きしめる。
「勇太さんも罪なひとだね。
　茜はこんなに素敵なのに。」
「…うん。
　エレプモン。」
「うん？」
「ありがと…。」
（正直、マグナモン様にこっちへ行くように言われた時は面白半分で、適当にバックレてやろうと思ったけど…。）
「ワタシは茜の傍にいるよ…。」
「うん…。」

17

　2日後…。
「ぬるい事は言わねえ!!コソコソしねえで正面から行くぞ！野郎共カチコミだ!!!!!!」
「「応!!!」」
　工場長の掛け声に併せ、全員の叫び声が響く。
　勇太と茜も秋子と同系統のパワードスーツを着、TEZ へと向かう。

18

DW: シオン。

シオンに正規に召喚された人間以外は全て、サーバーを占拠した天使型デジモンからアクセスを弾かれていた。

故に今いる人間は、一部を除き天使型デジモンに誘拐された人間のみである。

更に、ほぼシオンサーバーを占拠した天使型デジモン達は、その支配範囲を広げていき光を中心とした一部の人間、デジモンはメタルエンパイアに逃げ延びていたが、包囲されじわじわりと真綿で首を締めるように追い詰められていた。

「先に行け！ウルヴァモン！ガードロモン！

ここは、俺がウィルス種で悪魔型ならお前達より俺をマンティコアモンは襲うはずだ！」

「馬鹿言ってんじゃないよ！私も!!」

「だめ！みんな一緒じゃなきゃ嫌！」

「ガードロモン、その子と他のデジモン連れて逃げな…。」

「…。」

メタルエンパイアの端、マンティコアモンが土煙を巻き上げ悠々と姿を現す。

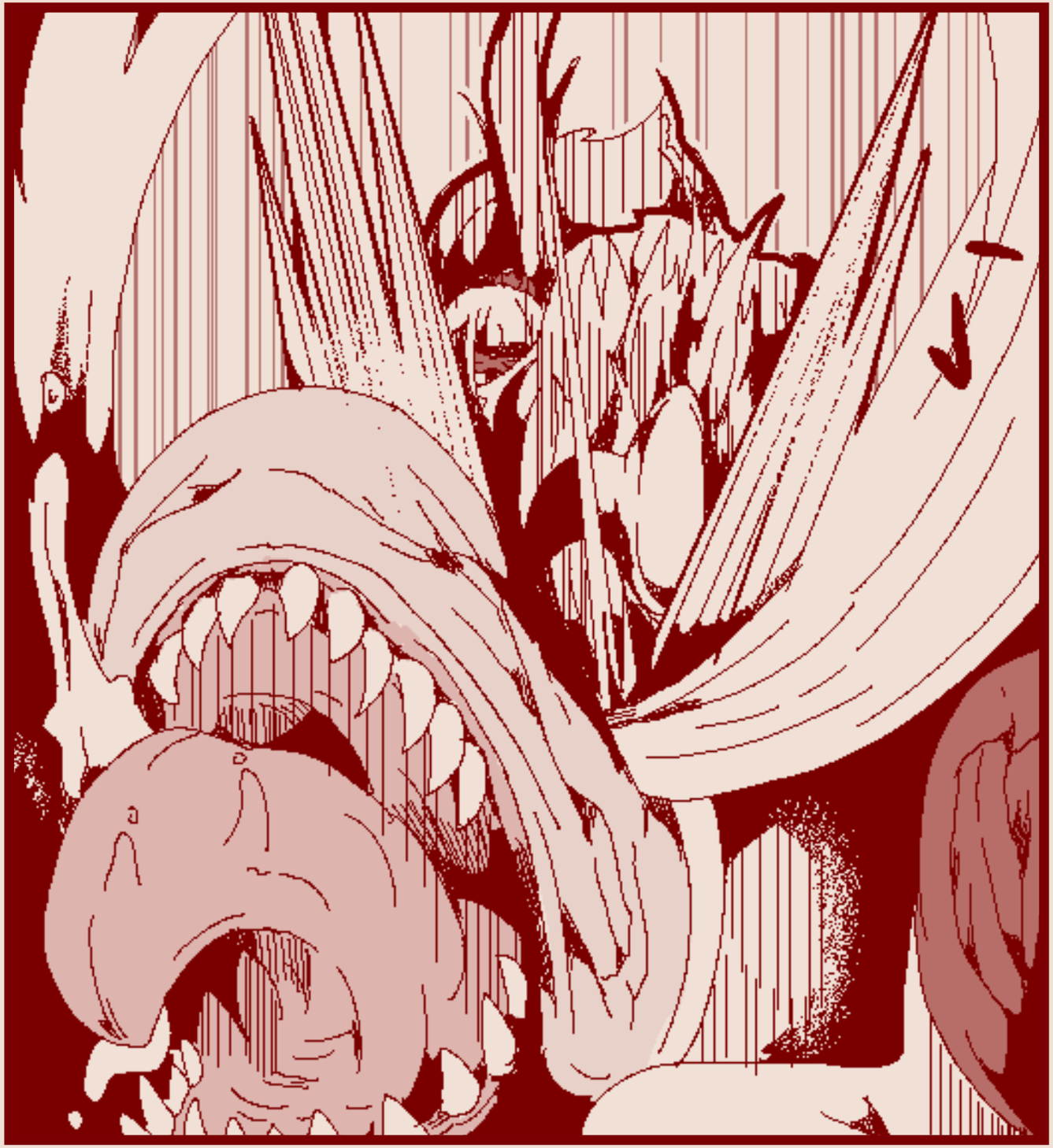
一部の人間は、仮ではあるが一部のデジモンとパートナー関係を結び、噂を聞きつけ逃げてくるデジモン達を保護していた。

しかし、圧倒的な力を誇る天使型デジモン達の前ではその行動ひとつひとつが危険なものであった。

今もマンティコアモンが囮となった必死のイビルモン達を難なくと屠り、喰らおうとしていた。

「だめ!!!！だめええ!!誰か!!!！」

少女の声が虚しく響き渡る。



喰らおうとする次の瞬間、土煙を払い、何かがマンティコアモンの背中から粉砕する。

そこにいたのは、ゴーグルを着けた鬼塚 光とデュナスモンであった。